

明治・大正、昭和初期の波止場文化と宣伝媒体の研究

【代表者】

菅原真弓 大阪市立大学 文学研究科 准教授

【共同研究者】

天野景太 大阪市立大学 文学研究科 准教授

小池志保子 大阪市立大学 生活科学研究科 准教授

木川剛志 和歌山大学 観光学部 准教授

村田隆志 大阪国際大学 国際教養学部 准教授

【研究概要（申請書より抜粋）】

平成 29 年度に採択された「明治・大正、昭和初期の波止場文化と宣伝チラシの研究」の継続研究である。港は、外国文化に触れる最前線であると同時に、外国人が居留する最前線でもある。相互の文化が交流し、いわゆる異国情緒溢れる空間が生まれる場所でもある。本研究は、船舶が海外との交流の主要な経路であった時代、明治・大正、昭和初期の波止場を中心として形成された大衆文化（本研究では波止場文化と呼ぶ）を研究し、当時の都市交流のダイナミズムを検証する。

この検証のために、本研究では多角的視点によって、波止場文化を研究する。一つに港町で発行された印刷物や港町を取り上げた旅のチラシや雑誌を収集し、ビジュアルイメージとしての分析および観光メディア論的な検討をおこなう。加えて、昨年度の研究会でのディスカッションや個々の分担研究の成果を踏まえ、今回の研究期間では大阪から紀伊半島にかけての港とそこで育まれた「波止場文化」の観光的検討を行う。比較の対象として基隆港（中華民国）を挙げる。一方、大阪の波止場文化の担い手として都市への移住民の受け入れ先となった長屋の研究をもこれに加える。長屋に関してはその建設当時の都市のダイナミズムに加えて、現代ではリノベーションの対象となっており、積層された歴史性がどのように現代に受け入れられているかも研究対象とする。現在、インバウンド旅行者のために民泊施設としてリノベーションされている事例も多い。当初の都市流入民の長屋が今、改めて国外からの旅行者の受け入れ場所となる、この物語についても研究する。

本研究では研究の取りまとめ及び印刷文化に関する検討、研究を菅原が、大阪の長屋建築とその推移現状を小池が担当、観光学・交通文化史の視点からは天野と和歌山大学の木川が分析する。木川は主に他国との比較分析を担当する。またこのような多角的な視点から、波止場文化を分析し、戦争で断絶された戦前の頃の国際化の潮流と、当時の流れが現代にどのように生きているかを検証する。研究成果の公表方法として展覧会での公開を考えている。展示企画のキュレーションを、主に村田が担当。展示場所としては学術情報センター内ツクルマを考えている。